1 「みんなのねがい」の歴史学へ

「学校へいきたい。ともだちがほしい。」と子どもたちは叫んでいます。父母も、教師も、保母も、医師も、障害者を差別し、権利を奪うものの本質をつかみ、それとの闘いに立上っています。それらの一つ一つを大切にして、「みんなのねがい」に結集しましょう。「みんなのねがい」を育てていきましょう。

1970年2月、全障研の機関誌『みんなのねがい』が創刊されます。これは、創刊号の最後のページに添えられた「発刊のことば」です。発達保障の根っこには「どんなに障害が重くても発達する」「障害の有無にかかわりなく発達の道すじは共通である」という発達のとらえ方があります。教師や親たちはこうした発達の理解を手にしたことで、「発達しない」「教育不可能」とみなされて教育の権利を不当に奪われてきた障害のある子どもたちが「発達する」という事実をつくり出し、「権利としての障害児教育」という考え方を生み出していきました。「権利としての障害児教育」は「学校へいきたい。ともだちがほしい」というねがいに確かな根拠を与えながら、一人ひとりのねがいを「みんなのねがい」へと練りあげていくのです。そうした40年以上も前の話から始めていきましょう。

■入学式は涙の別れ

一人の母親の声を聴いてください。[1]

やがて入学式の当日となりました。主人とともに、いいようのない不安の中に、学校からいわれた品々を積みこみ、まだ一度も走ったこともない丹後路を北へ北へと走り続けました。

長い道中、好きなおやつも食べず、子どもは何を話しかけても話し返してはくれませんでした。学校へ着いても、自分の席にすわろうともせず、ただおびえるように私に寄りそい、必死に着物を握りしめているのです。あまりの遠さに子ども心にも不安を覚えていたのでございましょう。「お母ちゃん、帰ったらいやや」とだだをこね、なだめたり言いふくめても、なおも泣き叫び、気でも狂ったように追いす

がる、その手をやっとの思いで振り切り、寄宿舎の先生にお願いをして、あふれ落ちる涙をぬぐいもせず帰途につきました。どうかお母ちゃんを許してと、幾度も幾度もわびながら……。

娘には脳性マヒがあり、家から遠く離れた養護学校の中学部に入学し、寄宿舎での生活を始めることになっていました。その学校とは、養護学校義務制完全実施（1979年）に先がけ、教育から排除されてきた障害の重い子どもたちの受け入れを宣言した京都府立与謝の海養護学校（1970年本格開校）です。そのとりくみは「権利としての障害児教育」にもとづく学校・地域づくりのモデルとして注目されました。

当時、京都北部には与謝の海養護学校が、南部には向日が丘養護学校（1967年開校）がありましたが、この親子が住む口丹（くちたん）地域はその中間にあっていずれの学校からも遠い「谷間」の地域だったのです。

誰もが待ちわびた入学式です。学校には「入学おめでとう」の笑顔があふれていたことでしょう。しかし、家の近くに養護学校がない子どもたちにとって、入学式は涙の別れだったのです。親たちは、やっとの思いで養護学校にたどり着いたけれども、「はたしてこれがすべての国民に与えられた義務教育といえるのだろうか。なぜ、障害があるからといって幼い子どもとこんなにも離れて暮らさなければならないのか」と苦悶せずにはおれませんでした。

入学後も悩みは続きます。近所には「あんな子どもを預けるなんてひどい親だ、鬼のような人だ」と陰口を叩く人もいました。休日のたびに子どもを迎えにいくにも、学校が遠すぎてたくさんの労力とお金がかかります。わが子の送迎のために、厳しい家計をやりくりして自家用車を購入した家庭もありました。学校行事に毎回出席することもできず、「楽しい子どもの力いっぱい発表する姿さえ見てやることができない」という苦悩も聞かれました。

■みんな行ける学校にしてほしい

1974年3月、京都府の口丹地域で「口丹養護学校設置促進研究集会」が開かれ、親たちは「わたしたちの地域に養護学校がほしい」と次々に訴えました。[2]

東京へ行くのでさえ三時間余りで行けます時代に、学校から少し調子が悪いと聞いても片道三時間、四時間もかかるのでは、ちょっと見に行こうと思っても、二の足をふみます。鬼になったつもりで「先生よろしくたのみます」とお願いするとき

の気持ち、平気のように聞こえても、心の中の思いは本当につらいです。…仕方ない子どものためという言葉であきらめてはいるものの、親の気持ちは仕事をしていても上の空ということもたびたびでした。あまりにも学校が遠すぎます。…〔与謝の海養護学校が：河合〕すばらしいだけに、よけいにこんな学校が近くにでき、どうしても誰もかも、みんな行ける学校にしてほしいのです。

社会には「豊かさ」が広がっているにもかかわらず、障害のある子どもには必要な教育や当たり前の生活すら保障されない。子どもを養護学校に行かせるために、家族の仕事や生活を犠牲にしなければならない。わが子はどうにか養護学校に入学できたけれども、学校にも施設にも行けず、家のなかでひっそり暮らす子どもたちがまだまだいる。

口丹地域の親たちは、「学校に子どもを合わせるのではなく、子どもに合った学校をつくろう」という与謝の海養護学校のとりくみを鏡とすることで、一人ひとりの悩みや悲しみを社会の矛盾としてとらえ返し、「私たちがやらなければ、苦しいことは苦しいと訴えることができないのではないか。手をとりあって進もう」と、みずからを要求と権利の主体としてたちあげていったのです。

■尊い血潮の流れる一人の人間として

養護学校づくりの運動にとりくむ親たちは「たとえ障害はどのようであれ、声は出さなくとも夢があります。…何とぞ、尊い血潮の流れる人間の一人としておぼえていただき」、「ボクもワタシもアホやない。人間なんや」という子どもたちの声を受けとめてほしいと訴えました。「みんな行ける学校」がほしいというねがいは、口丹地域の人びとにも共感をもって受けとめられ、京都府立丹波養護学校（1979年開校）として実を結びました。

このように1960年代後半から障害のある子どもの不就学をなくし、権利としての教育を保障しようとする運動が各地でとりくまれていきます。「就学猶予・免除」となり、在宅のまま生きる力を奪われ、いのちを落としていく子どもたちの姿は、障害のある子どもたちの尊厳をふみにじる不平等な社会の価値や仕組みを物語っています。

教育へのねがいを語るなかで「人間」という言葉が繰り返し用いられたように、「子どもに合った学校がほしい」というねがいは、障害のある子どもたちを「人間の一人」として認め合い、社会の主人公として大切に育ててほしいという人間平等への希求でもありました。

憐れみや保護の手をさしのべるのではなく、人間の尊厳と人格発達への権利にねざし

た「この子らを世の光に」という発達保障の思想も、そうした平等への希求と苦悩のなかで受けとめられていったのです。当時の人びとがさまざまなねがいを込めて手渡し合った「発達を保障する」という言葉は、今日のわたしたちが想像する以上に輝き、重く響いていたのではないかと想像します。そうであるがゆえに、発達へのねがいは、矛盾や制約を抱えながらも「みんなのねがい」へと深められることで、人と人を結びつける力をもつことになったと思うのです。

■苦悩と矛盾に目を凝らしながら

先ほど、子どもに合った教育を求めることが、家族の生活基盤の不安定さをもたらしてしまう現実をみました。養護学校に入学するというねがいの実現が、新たな矛盾や苦悩を生んだのです。しかし、そのことが「子どもに合った学校」を「みんなが行ける学校」にしていこうという要求にいのちを与え、運動のダイナミズムが生まれていったことに大切な意味があると思うのです。障害のある子どもが学校に行くことが当たり前になっていく歴史の過程をとらえるうえで、ねがいと現実とのズレ、そこに生まれる新たな矛盾や苦悩に目を凝らしながら、ねがいの深まりをつかむ視点を大切にしたいと思います。

歴史とは「現在と過去との尽きぬことを知らぬ対話[3]」といわれます。それは、すでに決められてしまった出来事として過去を語ることを意味するのではありません。「今を生きながら過去を問う[4]」という制約を自覚しながら、つまり今日のわたしたちの感覚や価値観を問い返しながら過去を認識していくこと、そのくり返しが歴史を学ぶということなのです。

こうした歴史の見方は、私たちが「当たり前」とみている現実のなかにある矛盾や苦悩に目を向けていく感度を高めていくことを手助けしてくれるでしょう。だからこそ、障害のある子どもたちの「学校に行きたい」というねがいを現実のものとしてきた歴史をくり返し学び合い、世代を超えて語り合うことを大切にしたいと思うのです。

■「みんなのねがい」を語り合う

障害のある子どもたちも学校に行くことが「当たり前」という現実は、「学校に行きたい」というねがいが「みんなのねがい」へと練りあげられていく過程でつくり出されていきました。時々、「若い世代の人たちは、制度があって当たり前と思っている。自分たちでつくろうという意識が弱いのではないか」というベテラン世代の憂いを聞くことがあります。自分たちがつみあげてきた実践や運動のバトンを、次世代にしっかりと

手渡したいという思いを感じます。とはいえ、「制度があって当たり前」という今日の感覚も、歴史の到達点として受けとめることが大切ではないでしょうか。

何もないところから制度をつくってきた世代、すでに制度ができあがっている世代、それぞれが生きてきた歴史の重みは比べようもなく、ひとしい価値をもっています。世代による感じ方や見え方の違いを大事にしながら、お互いが育んできたねがいを語り合うことで、歴史がつむぎ出す時間の層は厚みを増してきます。厚く積みかさねられていく歴史のなかでこそ、わたしたちは一人ひとりのねがいを、世代を超えて分かち合うべき「みんなのねがい」へと練りあげていけるのではないでしょうか。こうして「みんなのねがい」を育て合い、語り合う経験が、歴史をつなぐとともに、今ある実践や制度をよりよいものにつくり変えていこうとする、かけがえのない原動力になるのだと思うのです。

日本近現代思想史研究者の鹿野政直（かのまさなお）は、「個性的なものは必ず普遍性に通じる要素をもち、普遍性は個性をやどり木として顕現する」[5]と言います。この本でも、鹿野の言葉に学びながら、一人ひとりのねがいや悲しみのなかに、みんなのねがいや悲しみを読みとる、あるいは、みんなのねがいや悲しみのなかに、一人ひとりのねがいや悲しみを位置づける。この往復によって、発達保障の考え方やとりくみが、その時々の時代や社会のなかでどのような広がりと深まりをもったのかを確かめてみたいと思います。ずいぶん大げさな表現かもしれませんが、「「みんなのねがい」の歴史学」をつくるために必要なものを一緒に探っていきましょう。

注

（1）口丹養護学校設置促進協議会『みんなの力で口丹に養護学校を―学校づくり地域づくりの運動とその経過（中間まとめ）』1976年。
（2）同前。
（3）E・H・カー『歴史とは何か』岩波新書、1962年。
（4）大門正克「「生存」の歴史学の構想―歴史学再考のために」『年報近現代史研究』第8号、2016年。
（5）鹿野政直『歴史のなかの個性たち―日本の近代を裂く』有斐閣、1989年。